

# 虹の架橋

## 今月の題字 今泉智幸さん

(みどり市大間々町)

今泉家具センター2階のインテリア&カフェ・タンジェリンは美味しいコーヒーと落ち着いた雰囲気自慢。今泉さんとは親子3代のお付き合いです。

虹の架橋「検索」で、インターネットからでもご覧いただけます。

三百八十九年目の大間々祇園まつり  
戦時中の神馬は長谷川四郎氏の愛馬

大間々祇園は寛永六年(一六二九)、神明宮の初代・大楽院勝尊が五穀豊穡や絹市の繁栄を願い、京都八坂神社の御分霊を三丁目(現在の三丁目集会場)に祀ったのが起源。長い歴史の中には天皇陛下のご崩御や戦争等で開催が危ぶまれた年もありましたが伝統の祭りを守り続けたいと願う町民の熱い思いにより途切れずに続いてきました。



大間々祇園の貴重な記録を発見

大間々祇園が詳細に記されている「百事録」や「八坂祭典日記」には「明治四十五年七月三十日、聖上陛下御崩御アラセラル。此ヨリ大正元年と改元セラル。八坂祭典は町長ヨリ無期延

期ノ通知アリ」しかし、その後の通達で「八坂祭典ハ神輿ノ徒御下獅子及天狗ヲ出ス」と記されておられ、祭りの神事だけは二カ月遅れで十月に行われました。昭和十七年は五丁目当番町。八月二日の記録には、「午前十時ヨリ神馬、神馬を廻ス。神馬ハ長谷川四郎氏ノ愛馬ヲ借用、物資不足の折ナレドモ、代用品ノ配飾宜シク実ニ美々シク出来タリ、其ノ勇姿ヲ撮映ス」と記されています。



小耳にはさんだ  
いい話  
(文責・菊)《276》

### 「感謝」するより「恩」を返せ

執行草舟さんと清水克衛さんの対談集『魂の燃焼へ』という本の中に、「感謝」するより「恩」を返せ、という話が出てきてハッとさせられました。「：いま、みんな感謝、感謝って言うじゃないですか。しかし、感謝というのは対象がないんですよ。だから、しつぱないでいい。でも、恩っていうと対象がある。たとえば親とか、先生とか、親分とかね。だから、恩は必ずその対象に返さなくちゃいけない。それが現代人は

大っ嫌いなんだ。親のおかげで成長して、大人になって、じゃあ親にどんな恩返しをするかってことですよ」日頃、感謝という言葉が安易に使っている自分が叱られているようで反省しました。先日、「人生で大切なことは、すべて厨房で学んだ」という本を読みました。著者の上神田梅雄先生は、新宿調理師専門学校校長先生。本の中で上神田先生は、「父と母との間に生を受けたご縁、そして養育してくださった深いご恩に、計り知れない宿命を

感じます」と書いています。上神田先生のお父様は大正四年生まれ。祖国のために二度も兵隊にとられました。戦後に兵隊恩給の受給請求期限が迫ってきた時、担当の方が何度も家に来て、「あなたは恩給をもらう権利が十分にあります。堂々と請求すべきですよ」と助言してくれたのに対し、「戦死した戦友もたくさんいる中、恥ずかしながら生きて帰ってきて、いまさら恩給をくれなくて、物乞いのようなのはできない。俺は印鑑を押さない」と答えた姿が強烈に残っているそうです。上神田先生のお母様は尋常小学校しか出ていません。その時も「人生はご恩返し」だと教えられました。

## 世界一小さな 足利屋 トイレ美術館

今月の写真《276》  
保坂美枝さん『遊歩道』



渡良瀬川の左岸、撥滝橋と高津戸橋をむすぶ遊歩道は大間々を代表する絶景ポイントです。途中には景色のいい東屋や小さな吊り橋があり、四季折々の景色が楽しめます。愛犬プーちゃんも元気があった頃はいつも、夫婦と一匹で散歩を楽しみ、愛犬も遊歩道が大好きでした。出版・編集関係のお仕事をされる保坂美枝さんが撮った写真はインスタグラム uzumaki\_no でご覧いただけます。大間々の素晴らしさを再発見し、その輪を広げるために、保坂さんたちを中心に九月に楽しいイベントを計画中です。

## 靖ちゃん日記

七月三日(火)  
午後二時半に大間々を出発して五時十分に御殿場の時之栖に到着。六時からジョイ会。ジョイ会は年に三回、漢方と西洋医学を極めた女医・徐桂琴先生に学ぶ勉強会。今日のテーマは「言葉と心との関係」。「嬉しい」は中国で「我來喜」(ワオライシイ)で日本語と似た発音、宇宙の喜びが聞こえてくるという意味。「嬉しい」、「笑う」、「ありがとう」という発音は、人相と心相を変え、精神相もよくなるという。徐先生が暗誦した中村天風の「運命の詠句」も同じ内容だった。勉強会後は参加者十二人で人生をエンジョイするジョイ会。時之栖の地ビールが「我來喜」、シラスのピザが「有難う」。飲んで食べて笑いか絶えな一時だった。時之栖の気楽坊で五種類の温泉に入った。今朝は三時に起きてサッカードを覗いたので眠気と酔いで頭がぼーっとした。「ぼー」と生きてんじやねーよ」ととちこちゃんに叱られそうだ。

たが「母の口から発せられる、躰のため」の教え・諭し・戒めに満たされた言霊は、どれもこれも私たち子供のその後の人生行路を照らしてくる灯台の灯りとなりました。：私の生き方そのものが、母への報恩であり、母の歩んだ人生を意義深いものにできるかどうか問われているようです。去年、伊東で行われた勉強会で上神田先生と同じ部屋になり、じっくりと話を聴かせていただきました。その時も「人生はご恩返し」だと教えられました。



第二七七号は九月一日(土)発行予定です。

♡ やつちゃんの似顔絵提供…ひさかさん